

「しよう」「しょうか」の意味・用法：日本語教育への提案（第1部 コミュニケーションのための日本語教育文法）

著者	山下 由美子
雑誌名	日本語コミュニケーション研究論集
号	2
ページ	29-38
発行年	2012-11-30
URL	http://hdl.handle.net/2241/00145251

「しよう」「しようか」の意味・用法

—日本語教育への提案—

山下由美子（創価大学）

要 旨

「しよう」「しようか」は、学習者に定着しにくい項目とされている。そこで、KY コーパスにおける学習者の誤用を3つのタイプに分けた。誤用の原因は日本語テキストでの導入にあると考え、代表的なテキスト及び指導書での扱いを紹介した。なかでも〈勧誘〉には「しよう（か）」「しないか」の形式があり、多くのテキストにおいては混同を避けるため提出課が分けられている。しかし、同一課で導入することで使い分けが明確になるであろうと考え、日本語教育への提案を行った。また、「しよう」「しようか」は多くの用法を担い得る文末表現であるが、本稿では学習用テキストでシヨウ形が用いられる用法を、6つの基本的用法とし分類を行った。

キーワード：しよう、しようか、しないか、誤用、用法

1. はじめに

モダリティの文末表現である「ましょう」は動詞の「連用形＋ましょう」と、形の作り方が易しいため、多くの日本語学習用テキストでは初級の前半で扱われる項目である。しかし、フォード丹羽（2005）はテキストでの提示用例自体が不自然であったり、対人関係に言及されていなかったりすることや、形式重視の扱いに終わっている点に触れ、学習者の運用に結び付きにくい項目であるとしている。また使用項目としての扱いと理解項目としての扱いを分ける必要があると指摘している。テキストで例示された用例自体が、実際のコミュニケーションにおいてのものとは異なっているとしても、それは学習用テキストであるから、初級であるからと、日本語教育に携わる中で教師自身が知らず知らずのうちに、違和感がなくなってしまうのではないかと。学習項目の定着を目標とすることで、フォード丹羽（2005）が指摘するように、そこに対人関係に言及されていないがゆえの不自然さなどは、見過ごしてしまっているのではないだろうか。

ではなぜ「ましょう（以下、しよう）」「ましょうか（以下、しようか）」は定着しにくいのか、また学習者はなぜ不適切な発話をしてしまうのか、その原因を探り解明していきたい。また「しよう」「しようか」が担い得る多くの用法のうち、本稿では基本的用法を6つに分類し紹介する。さらに日本語教育における指導の提案をすることが本稿の目的である。

2. KY コーパスに見られる学習者の誤用例

日本語学習者が「しよう」「しようか」を適切に運用できていない例をKY コーパスから挙げ、それぞれの誤用を3つのタイプに分け考察する。

2.1. 応答における誤用

次の会話はそれぞれ応答として用いられた「しよう」である。

- (1) (ロールプレイで、S(被験者)がT(テスター)に自分の知り合いの男性を紹介することになる)

T: じゃあ、決まったら連絡ちょうだい

S: はい、そうしましょう (中国語話者・上級レベル)

⇒はい、そうします

- (2) (OPI 終了時)

T: …はいじゃー、あの一これから1年間、〈****〉はいはい、ね、一緒に、日本語勉強がんばりましょう

S: がんばりましょう

⇒(はい) がんばります

T: はい、{笑い} じゃ今日はどうもありがとうございました

S: ありがとうございました (英語話者・中級下レベル)

(1) は「はい、そうします」など、基本的にはシヨウ形でなくスル形で答えるべきところである。なぜ学習者がこのような誤用を犯しているのか検討するために、『初級日本語』の次の例文を挙げる。

・さんぽに行きませんか。——はい、そうしましょう。

この場合、散歩に行くことを誘われた聞き手は、「はい、そうしましょう」と応答することで、自分自身も散歩に行くことを積極的に望んでいることを表し、あたかも互いに誘いあうかのように勧誘に応じている。なお、Sが上級レベルである(1)のような誤用は、単に適切な運用ができていないという問題だけでなく、実際のコミュニケーション場面で使用すれば、対人的配慮を欠いた発言とも受け取られかねない。

(2) の場合、Sは「一緒に～ましょう」の典型的文型から勧誘であると受け取り、積極的な肯定の応答として「がんばりましょう」を使用しているのであろう。

2.2. 「ませんか」を使用すべき場合

次の会話は、ロールプレイにおいてSがTを誘う場面での会話である。

- (3) (ロールプレイ)

S: Tさんですか、Sです、〈はい〉あの、〈ええ〉あ、来週わたしの友達で、〈ええ〉あーパーティーやりますが、いっしょに行きませんか

⇒いっしょに行きませんか

T: 来週のいつ

S: 来週の金曜日ですが (英語話者・上級)

Sの発話時にはTは一緒に行くことが前提とはなっていないので、「(行き) ませんか」を使用するのが適当であるが、適切な運用ができていない。日本語学習用テキストの多くは勧誘の形式として「しないか」と「しようか」を扱っており、提出課を分けるなどの工夫はされている。しかし構造シラバス中心のテキストでは、文型項目としての学習に重点が置かれており、文脈として使い分ける練習はなかなか行えないことも両者の区別がつけにくい原因であると考えられる。

2.3. 助言要求における誤用

次の会話は、S 自身で判断ができない事柄について、T に助言要求を行う発言である。

(4) (T が S に、今度は自分に何か質問するように指示している)

T: はいはい、ただし、私はこの [大学名 2] のね、偉い先生ですから、出来るだけ丁寧
に聞いて下さい、〈あー〉いいですか、何でもいいですよ、はい、どうぞ

S: あの一、敬語使いましょうか

⇒敬語使ったほうがいいですか

T: うん、あの一何でもいいですよ (韓国語話者・中級中)

(4) の会話は「たほうがいいですか」など、聞き手に助言を要求する発話に置き換えると、自然な発話となる。〈申し出〉の場合であれば「ましょうか」の使用により丁寧な発話となるが、(4) においては、全く逆の効果をもたらしている。

以上見てきたように、「しよう」「ましょうか」は、適切な使い方ができていないと不自然な表現になってしまうばかりか、本人の意に反し、対人的配慮に欠けた発話となってしまう危険性もある、使用において注意の必要な形式であることがわかる。では、日本語教育の初級段階においては、日本語学習用テキストでどのように提示されているのか、また指導する教師は指導書を通じて、どのような指導上の注意が与えられているのか、次の 3. で比較検討する。

3. 日本語学習用テキスト及び教師用指導書での扱い

2. で KY コーパスの会話場面に見られる日本語学習者の誤用例を挙げたが、学習者の日本語レベルが上がっても誤用が見られる原因は、初級段階での導入に原因があるのではないかと考えられる。

初級段階で導入されているにもかかわらず、学習者の誤用が見られた〈勧誘〉及び〈肯定の応答〉の用法を中心に、5 種類の日本語学習用テキスト及び、教師用指導書での「しよう」「ましょうか」の扱いを調べた。表 1 は、各テキストでの初出課を、用法ごとに挙げたものである。なお、「*」は提出なしを表す。

表 1 テキスト別各用法初出課

テキスト 用法	みんなの 日本語	げんき	初級日本語	新装版 日本語初級	新文化 初級日本語
勧誘	6 課	5 課	4 課	*	15 課
肯定の応答	6 課	5 課	11 課	5 課	15 課
申し出	14 課	6 課	*	8 課	9 課
意志形導入	31 課	15 課	20 課	30 課	20 課

『みんなの日本語』は「ましょう (か)」と「ませんか」の混同を避けるため、〈勧誘〉表現として「ませんか」で誘い、〈肯定の応答〉として「ましょう」で答えさせる対処が、

次の例のようになされている。

(5) いっしょにビールを飲みませんか。——ええ、飲みましょう。

また、『新装版日本語初級』では、学習用テキストには提示されていないが、教師用指導書において、〈勧誘〉の「ませんか」は話者が相手の意向を尊重する態度を表しつつ、何かを一緒に行うよう勧誘する表現であるとしている。また、「ましょう」は「ませんか」より強い勧誘の表現として使用する場合と、相手の勧誘に賛同する話者の意志を表す応答として使用する場合があるとしている。以下に例を示す。

(6) A: 一緒に映画を見ましょう。〈強い勧誘〉

B: ええ、見ましょう。〈賛同〉

日本語学習用テキストでの「しよう」「しようか」の扱いは、形式的な混同を避けることに重点が置かれ、会話場面においても対人関係の設定がなされていない。しかし、2. の KY コーパスの会話例で見られたように、「ませんか」と「ましょうか」の形式的な混同による誤用が、対人関係を無視した配慮に欠ける印象を与えてしまう。実際の日本語学習者の使用実態を見たとき、初級段階での「しよう」「しようか」の扱い方にはまだ多くの問題があると言えるだろう。

4. 先行研究

「しよう」「しようか」をめぐる先行研究のうち、安達（1995）は「しないか」は聞き手に対する配慮を持つのに対し、「しよう」による〈勧誘〉は、聞き手に対する配慮を持たない強い勧誘を表す形式であるとし、丁寧さの分出に違いが生じることも指摘している。

安達（1995）や日本語記述文法研究会編（2003）では〈勧誘〉を次の表2のように、話し手と聞き手が共同で行為の実行をする「グループ型」と、話し手の行為に聞き手を引き込もうとする「引き込み型」に分けている。この中で「しようか」が「引き込み型」には使用できない例を以下に示す。

表2 〈勧誘〉の型

	しよう	しようか
グループ型	○	○
引き込み型	○	×

(7) *今からカラオケに行くんだ。君もいっしょに行こうか。

⇒「しないか」が用いられることが多い。

姫野（2009）は、意志形は本来1人称に用いられるが、聞き手を包括的1人称に取り込むことによって勧誘表現として用いられる「～ましょう（か）」に対し、「～ませんか」は本来2人称主語で用いられる文型であるとしている。日本語教育において、この両方を「勧誘表現」として一括りにして扱っていることが学習者の誤った理解を招いているのではないかと指摘している。学習者の誤用を未然に防ぐために、日本語教材において提出する例文や会話文を吟味し、会話参加者の人間関係を明確に提示し、適切な解説を加えるなど、日本語教育の更なる整備を訴えている。

また、工藤（1989）では「遠回しな命令」、仁田（1991）では「やわらげた命令」、樋口

(1992) では「とおまわしの命令」、宮崎 (2007) では「遠回しの命令」と、次の (8) のように動作主に 1 人称を含まないという点で共通の用法を定義しているが、それぞれ用法を表す表現が異なる場合もある。

(8) 教師「みなさん、静かにしましょう」

その他、場合によっては「しよう」「しようか」が使用できるとする「命令的指示」(姫野 2009)、「意志の表出」「決定の表明」「提案」「促し」(安達 2002)、「意思決定前の迷いの段階」「意思の決定段階」(宮崎 2005)、「説得」「指導」「宣言」「提案」「相談」(宮崎 2009) など、日本語教育では導入されない用法も挙げられている。

以上の用法は、研究者によりその分類の仕方や用法の表現が異なっていることもあり、「しよう」「しようか」の分類やその説明は未だ充分になされているとは言いがたい。

5. 「しよう」「しようか」の基本的用法

日本語学習用テキストでシヨウ形が用いられる用法について、姫野 (1997、1998) の「行為指示」の有無を基準に「しよう」「しようか」の基本的用法を立てる。各用法に対し「行為者」「受益者」「決定権者」が S (話し手)、H (聞き手)、SH (話し手と聞き手) の誰であるか、そして各用法の学習用テキストでも扱われる典型的な文型を挙げ、まとめたものが次の表 3 である。

表 3 「しよう」「しようか」の基本的用法

行為指示	用 法	行為者	受益者	決定権者	典型的文型
○	勧誘 (引き込み型)	SH・H	SH・H	H	しないか、しよう
○	勧誘 (グループ型)	SH	SH・H	H	しないか、しよう、しようか
×	申し出	S	H	H	しよう、しようか
×	意志決定に伴う宣言	S	*	S	する、しよう
×	意志未定の表出	S	*	S	どうしよう (か)

① 勧誘 (引き込み型)

条件：S の実行しようとしている行為に H を引き込んでいく。「しようか」は引き込み型の勧誘としては機能しない。(安達 1995)

(9) あなたもこの饅頭を食べよう／*食べようか。(安達 1995)

② 勧誘 (グループ型)

条件：S と H をひとつのグループと見なし、H にも S と同じ行為の実行を求める。(安達 1995)

(10) F088：もういい？じゃあごはん食べいこつか。

F152：そうしましょつか。(名大)

③ 申し出

条件：H を行為者に含まず、H の利益になると思われることを、S の行為で実行しようと

する行為で、決定権はHである。

- (11) 「このベルクロの比翼仕立て（フライジャケット）いいですね。私もほしいな」
「お取り置きしましょうか」
「いえ、お金が貯まったらまた買いに来ます（笑）」（スタイリスト）

④ 意志決定に伴う宣言

条件：行為志向的発話であるが、その発話自体が行為として完結している。（山岡 2008 要約）

- (12) （喫茶店で。F101 が注文で迷っている）
F093：私は好きだけど、そんなくどくないことない？
F101：うーん、じゃ、キャラメルにしよう。（名大）

⑤ 意志未定の表出

条件：発話自体が行為として完結するための、意志決定前の段階を表す。

- (13) F036：ケーキ食べる？
F057：ケーキどうしよう。私、結構おなかいっぱいになっちゃった。（名大）
(14) アナタは、その時間には、必ず大なり小なり心が揺れる。もう何年もの間、ほとんど同じ問題に心をくだいてきた。飲もうか帰ろうか。一杯だけにしようか三杯までか。この○×式のようなテーマと選択をずっと繰り返してきたような気がする。（アナタ）

6. 日本語教育における指導の提案

本章では、日本語学習者にとって正しい運用に結び付きにくいのはなぜかを考え、日本語教育での扱いや指導上の注意点などについて提案をする。

6.1. 〈勧誘〉の形式「しないか」「しようか」混同の傾向

日本語教育での勧誘表現の扱いについて、姫野（2009）は1人称の意志形が勧誘表現に拡張した「しよう」「しようか」と、2人称主語で用いられる「しないか」を明示せず、両方を「勧誘表現」と一括りにした扱いをしていることが学習者の誤った理解を招いているのではないかと指摘している。

実際 KY コーパスにおいても（3）のように、姫野（2009）の指摘する誤用が出現している。

- (3) S：Tさんですか、Sです、〈はい〉あの、〈ええ〉あ、来週わたしの友達で、〈ええ〉あーパーティーやりますが、いっしょに行きましようか
教師用指導書での留意点においても、勧誘表現としての「しようか（ましようか）」と「しないか（ませんか）」を、いかに混同させないようにするかという指導にポイントが置かれていることから、混同しやすい傾向があることがわかる。

このような傾向に対し、「やさしい日本語」を提唱したのが庵（2008、2009）である。「やさしい日本語」は文法シラバスを採用し、ゼロビギナー対象で、全て産出レベルの文型項

目からなる Step1、及び Step1 を終えた学習者向けで、理解レベルの文型項目も含まれる Step2 からなる。この段階までを「初級」としており、〈勧誘〉の「～ましょう」は Step2 の理解レベルとして表 4 のように提示されている。ただ、「やさしい日本語」の文型項目に、〈勧誘〉のもうひとつの表現形式「ませんか」は含まれていない。

表 4 「やさしい日本語」文型項目

理解レベル	
モダリティ（対人）	～てもいいです（許可） ～てはいけません（禁止）
	<u>～ましょう（勧誘）</u> ～たほうがいいです（当為） ～なさい（命令）
その他	昨日買った本（はこれです。） （名詞修飾） 田中さんが来るか（どうか） （教えてください。） （名詞化）

これまで見てきたことから、〈勧誘〉の形式「しないか」と「しよう」の混同の原因はそれぞれ課を分けて提出することにあると考える。次の表 5 は、5 種類の日本語学習用テキストの〈勧誘〉の「ましょう」と「ませんか」の提出課をそれぞれ挙げたものである。

表 5 〈勧誘〉の「ましょう」「ませんか」提出課

	みんなの 日本語	げんき	初級日本語	新装版 日本語初級	新文化 初級日本語
ましょう	6 課	5 課	4 課	*	15 課
ませんか	6 課	3 課	19 課	5 課	17 課

『みんなの日本語』では同一課で提出されているが、「ましょう」は会話の形式としては提出されておらず、あくまでも〈肯定の応答〉として扱うよう指導書で述べられている。

多くのテキストでは、同じ〈勧誘〉の用法でありながら課を分けて提出しているが、それが却って混同を招いてしまうのではないだろうか。日本語学習がまだ不十分な学習者にとっては、「ます」より「ましょう」のほうが丁寧であるという認識を〈勧誘〉の用法にもあてはめてしまうため、「ませんか」を使用すべきところで「ましょう」を使用していることは想像に難くない。

したがって、混同を防ぐためには敢えて同一課で提出し、次の（15）のように一つの会話の例文として提出すべきであろう。

- （15） A：B さん、日曜日いっしょに映画に行きませんか。〈勧誘〉
 B：はい、いいですね。行きましょう。〈肯定の応答〉
 A：では、何時に行きましょうか。〈提案要求〉
 B：12 時はどうですか。〈提案〉
 A：はい、そうしましょう。〈肯定の応答〉

庵（2008、2009）が指摘するように、初級段階では〈勧誘〉の「ましょうか」は理解レベルに留めてもよいと考えるが、(15)のように「ませんか」で勧誘を行い、相手の了解を得てから〈提案要求〉を行うのである。あるいは行為実行の時間が決まっている場合なら、次の(16)のように「ましょうか」で〈提案〉を行うこともできる。

(16) A : B さん、日曜日 3 時から映画があるんですが、一緒に見に行きませんか。

〈勧誘〉

B : はい、いいですね。行きましょう。〈肯定の応答〉

A : では、2 時に駅で会いましょうか。〈提案〉

B : はい、わかりました。

以上のように、単なる質問と答えのみでなく会話の「連」(山岡 2008)で提示し、「ませんか」と「ましょうか」の使い方の違いを説明することで、混同は避けられるのではないかと考える。

6.2. 〈勧誘〉に対する〈肯定の応答〉「(はい、) ~ましょう」について

日本語学習用テキストでは、次の例のように〈勧誘〉に対する応答の表現として一様に「(はい、) ~ましょう」が導入されている。

『げんき』

(17) A : 寒いですね。お茶を飲みましょうか。

B : そうしましょう。

しかし、提示された会話例には対人関係が設定されていない。そこで(17)の会話例を用いて、仮に対人関係を設定してみると、次の(18)のような会話になるだろう。

(18) 上司 : 寒いね。ちょっと一杯やろうか。

部下 : (はい、) そうしましょう。

部下が上司に対し、「そうしましょう」と意志形を用いて積極的に自分の意志を表明して応じる答え方は、不自然であると同時に誘いに応じてやるというニュアンスも帯びてしまい、目下から目上に対して使用するには、配慮に欠けた失礼な表現とも受け取られかねない。

つまり、〈肯定の応答〉として「(はい、) ~ましょう」を使用するなら、積極的に自分の意志を表明できる場面と対話相手を設定し、導入すべきである。

『みんなの日本語』は、テキストでは「ええ、~ましょう」を導入しているが、教師用指導書においては「いいですね」や「わかりました」のほうが、より会話的な応答であるという説明がなされている。〈肯定の応答〉「ましょう」が不自然であるならば、対話相手との関係に関わらず一様に使用できる応答として、「はい、ぜひ」や「はい、いいですね」のほうが、一様に「ましょう」を使用して犯す誤りよりは、相手に対する配慮を欠く怖れは少ないと言えるだろう。

6.3. 「いっしょに~ましょう」への条件反射

日本語学習用テキストでは〈勧誘〉の「ましょう」「ましょうか」の文には、「いっしょに」が伴い、セットとして提出されることが多い。

『みんなの日本語』

(19) いっしょにビールを飲みませんか。——ええ、飲みましょう。

KY コーパスでは、次のような学習者の誤用があった。

(2) T: …はいじゃー、あの一これから1年間、〈****〉はいはい、ね、一緒に、日本語勉強がんばりましょう

S: がんばりましょう

T (テストター) の発話は「一緒に～(がんばり)ましょう」という〈勧誘〉表現の形式をとってはいるが、「がんばりなさい」という命令もしくは激励をしている。しかし、学習者はこの含意が理解できておらず、「いっしょに～ましょう」が聞こえたことで、積極的に条件反射として〈肯定の応答〉を行っただと考えられる。

以上見てきたように、話し手の立場や状況から、「いっしょに～ましょう」という典型的な〈勧誘〉表現の形式をとっていても〈勧誘〉ではない表現意図があることも、理解レベルとして導入すべきであると言えるだろう。

7. まとめと今後の課題

本稿は、フォード丹羽(2005)が「しよう」「しようか」が学習者に定着しにくい項目であると指摘したことに着目し、定着しにくいとされる原因の解明及び「しよう」「しようか」が担い得る基本的用法の分類、そして日本語教育への提案を行った。

しかし本研究では、日本語学習者の誤用例を KY コーパスのみで収集したため、テストターとしての日本語母語話者に対し、被験者としての日本語学習者という対立的立場の関係上、日本語母語話者の「しよう」「しようか」の出現率が、学習者の3倍以上という差が出てしまった。自然会話のデータを収集することができれば、使用率や使用される表現にも違いが出たと考えられる。

また「しよう」「しようか」の用法分類においても、基本的用法のみならず、さらに検討の余地があること、また、より具体的な日本語教育への提案を行っていくことが今後の課題である。

参考文献

- 安達太郎 (1995) 「シナイカとシヨウとシヨウカー勧誘文」 宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法(上) 単文編』くろしお出版
- (2002) 「第1章 意志・勧誘のモダリティ」 宮崎和人・安達太郎・野田春美・高梨信乃『新日本語文法選書4 モダリティ』くろしお出版
- 庵功雄 (2008) 『『やさしい日本語』をめぐって』『多文化共生社会における日本語教育研究会第4回研究会予稿集』
- (2009) 「地域日本語教育と日本語教育文法—「やさしい日本語」という観点から」『人文・自然研究』3 一橋大学
- 工藤浩 (1989) 「現代日本語の文の叙法性 序章」『東京外国語大学論集』第39号
- (1991) 『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
- 日本語記述文法研究会編 (2003) 『現代日本語文法④ 第8部モダリティ』くろしお出版

- 樋口文彦（1992）「勧誘文—しよう、しまし—」言語学研究会編『ことばの科学 5』むぎ書房
- 姫野伴子（1997）「行為指示型発話行為の機能と形式」『埼玉大学紀要』第 33 巻第 1 号
- （1998）「勧誘表現の位置—「しよう」「しようか」「しないか」—」『日本語教育』96 号
- （2009）「行為指示型表現に対する母語話者と学習者の適切性判断」『明治大学国際日本学研究』1 巻 1 号
- フォード丹羽順子（2005）「コミュニケーション能力を高める日本語教育文法」野田尚史・編『コミュニケーションのための日本語教育文法』くろしお出版
- 宮崎和人（2005）『現代日本語の疑問表現—疑いと確認要求—』ひつじ書房
- （2007）「<まちのぞみ>と<発動>の間」『岡山大学文学部紀要』48
- （2009）「談話における意志の形成」『岡山大学文学部紀要』52
- 山岡政紀（2008）『発話機能論』くろしお出版
- 山岡政紀・牧原功・小野正樹（2010）『コミュニケーションと配慮表現—日本語語用論入門—』明治書院

参考資料

- 『初級日本語』東京外国語大学留学生日本語教育センター編著 三省堂
- 『初級日本語 げんき I』The Japan Times
- 『初級日本語 げんき 教師用指導書』The Japan Times
- 『新装版 日本語初級 I』東海大学留学生教育センター編 東海大学出版会
- 『新文化初級日本語 I』凡人社
- 『新文化初級日本語 II』凡人社
- 『新文化初級日本語 I 教師用指導手引き書』凡人社
- 『新文化初級日本語 II 教師用指導手引き書』凡人社
- 『みんなの日本語 初級 I 本冊』スリーエーネットワーク
- 『みんなの日本語 初級 I 教え方の手引き』スリーエーネットワーク

KY コーパス

国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』モニター公開データ（2009 年度版）
名大会話コーパス

<<https://dbms.ninjal.ac.jp/nuc/index.php?mode=viewnuc>>，2010 年 12 月 23 日参照

用例出典

- 永倉萬治（1991）『アナタの年頃』講談社 （アナタ）
- 武藤直路（2000）『スタイリストになるには』ペリかん社 （スタイリスト）

※（ ）は本文中での出典表記を表す

（山下由美子、創価大学学士課程教育機構講師、yyumiko@soka.ac.jp）